

「草原の道」のルート復元によるユーラシア東西交渉史の基礎的研究

研究代表者：白石典之（新潟大学・超域研究機構・教授）

共同研究者：魏 堅（中国人民大学・歴史学院・教授）

ダムディンスレン・ツェヴェンドルジ

（モンゴル科学アカデミー考古学研究所・所長）

相馬秀廣（奈良女子大学・文学部・教授）

1. 研究の背景

本研究では、ユーラシア大陸の高緯度地帯に、東西に帯状にのびるステップ地域を通り、古代から東西世界を結ぶ幹線道路のひとつとして、交易や文化の伝播に寄与してきた「草原の道（ステップルート）」を研究するための基礎資料となる、具体的なルートの復元を企図した。とくに今回は、「草原の道」を使った東西交渉が活発であり、旅行記が豊富に残されている13～14世紀を中心とした。

13世紀初頭に成立したモンゴル帝国（元朝）は、ユーラシア各地に至る交通路を整備し、交易と情報の行き来を活発化させた。とくに駅伝制を整備し、煩瑣な関税を撤廃することにより、物流を迅速かつスムーズにした。モンゴルの支配下でユーラシアは文字通り一体化したと言ってよい。これはのちの大航海時代のプロローグ、あるいは現代のグローバル化の先駆けとして評価する意見もある。グローバル化の功罪が議論されている今日、当時の地域間交流の実態を解明し、その長所短所を正しく理解することは、あながち無意味ではないだろう。

ユーラシア大陸の東西を結ぶ幹線路として、タクラマカン砂漠縁辺を通る「砂漠の道（いわゆる従来の「シルクロード）」、南シナ海とインド洋を結ぶ「海の道（「海のシルクロード」とも）」とともに、モンゴル帝国の本拠地であるモンゴル高原からロシア平原に至る「草原の道（ステップルート）」の開拓にもモンゴル帝国は力を入れた。そして実際にこの道は、モンゴル帝国の発展に大きく寄与した。

「砂漠の道」と「海の道」に関しては、古くから地理学、歴史学、考古学の碩学の踏査・研究によって、そのルートが復元されて、学問的に大きな知見がもたらされてきた。だが、「草原の道」については、ルートの特定も完全になされておらず、不明な点が多いのが現状である。

「草原の道」の具体的なルートの復元研究は、20世紀初頭からヨーロッパ、中国および日本の研究者によって試みられてきた。彼らが使用したのは、13世紀の耶律楚材、やりつそざい長春真人、ちやうしゆんしんじんプラノ＝カルピニ、ルブルクといった旅行者の記録である。その着眼点と史料の有効性自体には問題ないが、フィールドワークによる検証が欠如していたため、

実証性に乏しく、詳細なルートを復元するには、今日まで至っていないと言ってよからう。

2. 研究の意義

本研究であつかうユーラシア内陸部のステップ地域にはカザフスタン、ウズベキスタン、モンゴル、そして中国、ロシアという国々がある。そこにはカザフスタンやモンゴルなどの途上国と、中国とロシアという大国との間に、歴史的に繰り返されてきたナーバスな力関係がある。今なお中国とロシアはいずれも自国の影響力をこの地域に及ぼそうとしており、その動きをアジアの一員である日本はもちろん、アメリカやEU諸国も注視している。地政学的にみて現在の最重要地域の一つといえよう。

また、これらの地域は、金、石油、石炭、ウラン、レアメタル、レアアースの産出国として最近注目され、今後大きく発展することが予想されている。これら資源の輸入国である日本が、当該地域と緊密な関係を持たざるを得なくなるのは確実であろう。

それにともない、この地域について知ることはますます重要になる。とくに、相手の歴史・民族・文化などを熟知することは、良好な交流促進のために不可欠である。日本にその歴史が紹介されることの多い中国やロシア以外にも、今後、モンゴル、カザフスタン、ウズベキスタンなどの国々との関連が深まるにつれて、この地域の歴史事情を正しく理解することが、日本人のわれわれに強く求められるようになるだろう。

ユーラシア内陸部のステップ地域が、現在のような民族分布・構成になったのは、中国・清朝と、ロシア帝国・ソ連の政治的方針によるところが大である。だが、その根底にあるのは、さらにさかのぼってモンゴル帝国の統治であり、その痕跡を今日に至るまで、強く引きずっているのである。モンゴル帝国期の歴史を知らなければ、当該地域の正しい理解はできないのである。

モンゴル帝国時代において、この地域の発展は、多くの部分を東西交流での利益によって成り立っていた。交易の幹線であった「草原の道」は、まさに生命線だったのである。そのルートを復元し、当時の社会状況を正確に捉えることが、ユーラシア内陸部のステップ地域の実像を知る上での、重要なアプローチ法の一つであることは間違いないだろう。

3. 研究の視点

本研究におけるわたくしたちのアプローチは、基本的には、旅行記の記述を踏まえて、丹念なフィールドワークを実施し、当時の遺跡を発見、あるいは既存のものを再調査するというものである。考古学的、地理学的、歴史学的に位置の地名の特定を行うというオーソドックスな手法といえる。しかし、このような作業すら、先行研究で

は成されてこなかった。今回はそれらの基礎的データにもとづき、衛星写真を利用し、地理情報システム（GIS）などを援用することで、科学的根拠を加えつつ、実証的にルート復元を行った。この点もこれまで見られなかった手法である。

今回、わたくしたちが研究の俎上にのせたのは『長春真人西遊記』である。長春真人（邱処機、1148～1227年）とは、中国山東に拠点を置いていた道教の一派である全真教の師である。彼は、当時、中央アジアにあったホラズム国と交戦中の、モンゴル帝国初代君主チンギス=カンの招請を受け、その戦陣のあったヒンドゥークシュ山脈（アフガニスタン北部）まで布教に行った。その1219～1224年にかけての、中国からモンゴル高原を経由しての中央アジア往復の旅、およそ11,000kmの旅程と、そこで一行が体感した人間・自然・文化を詳しく伝えるのが、同行した弟子の李志常により1228年に書かれた『長春真人西遊記』である。

研究代表者である白石は、すでにモンゴル、中国、ロシアでフィールドワークを行い、『長春真人西遊記』の記述と、考古学・地理学的所見を相互検討し、「草原の道」の実証的復元を試みてきた。その結果、かなりの部分は復元できたが、全ルートの復元には、いまだ至っていなかった。残された未復元の地域は、モンゴル国内の一部、中国内モンゴル自治区東部、新疆ウイグル自治区北部、カザフスタン、ウズベキスタンを通るルートである。本研究では、これらの地域の踏査を行い、ルートの完全的・総合的復元を試みようとした。

4. 研究の過程

計画の時点では、新疆ウイグル自治区北部、カザフスタン、ウズベキスタンを通るルートの復元を中心にしようと考えていた。そのため、それらの地域でのフィールドワークを研究の中核に位置付けていた。

フィールドでの支援を、中国人民大学歴史学院教授でモンゴル帝国期の考古学に詳しい魏堅氏、モンゴル科学アカデミー考古学研究所所長で中央アジアの考古学者と強い人脈を有するダムディンスレン・ツェヴェーンドルジ氏に依頼し、2名を共同研究者とした。

ところが、研究を開始して半年が過ぎた時点で、当地の治安状況が悪化し、それに関連して研究代表者の勤務先が当地の渡航許可に慎重な態度をとったことなどの、予期せぬ事由が生じ、途中で計画を練り直す必要がでてきた。

そこで財団側との協議のもと、①研究期間を1年間延長して2010年12月末で終了とすること、②相馬秀廣氏（奈良女子大学・文学部・教授）を共同研究者に加えること、③フィールドワークが十分できないことを補い、当該地域の高解像度衛星写真（Quickbird）を購入することに替えた。なお、相馬氏は地理学が専門で、高解像度衛星写真を判読するリモートセンシングの手法により、シルクロード地域の考古地理学

分野で多くの成果をあげている。

さらに、対象地域をモンゴル中～東部、中国内モンゴル東部へと切り替えた。これは前述のような、本来目的とした地域の政情が不安だからという消極的な理由からではない。当該地域に新たに解明すべき重要な研究課題が生じたからである。これについては「5. 研究の成果」で詳述する。

それでは研究期間中に実施した主要なフィールド調査歴を紹介しよう。

- ①2009（平成 21）4～5 月に 1 週間、モンゴル国中央部でフィールド調査（渡航費は別研究費で支出。研究協力費・調査車両代を当研究から支出）を実施した。
- ②2009 年 6～7 月に 1 週間、モンゴル国東部でフィールド調査を実施した。
- ③2009 年 7 月に 1 週間、中国内モンゴル東部でフィールド調査を実施した。

以上のようなフィールド調査の結果と、高解像度衛星写真の判読という室内作業を合わせて、13 世紀当時の「草原の道」の復元を、歴史、考古、地理学という多角的な面から行った。

5. 研究の成果

本研究では、モンゴル国中・東部から中国内モンゴル地域における、『長春真人西遊記』にみられる旅程を、詳しく復元することにほぼ成功した。その内容については、別途準備中の学術論文および著書で詳述する予定であり、本報告での公表は差し控えたい。しかしながら、本助成が確実に活かされたことを周知させるという意味において、成果の一端を紹介することで、その責めを塞ぎたいと考えている。

それというのは、中国内モンゴル自治区東部でのフィールド調査の成果である。具体的には、行政区分ではシリングル（錫林郭勒）盟と赤峰市西部ケシクテン（克什克騰）旗にあたる地域の、13 世紀から 14 世紀、王朝でいうと金代末期から元代を対象とする歴史地理学的考察の結果である。

この地域は、金代には北京路・西京路に属し、モンゴル高原の遊牧諸民族との和戦両面での交流の舞台で、モンゴル帝国勃興史と深く関連するが、地理的情報は少なく、また、元代には中書省北部と嶺北行省東南部に入り、外モンゴルと上都・大都を結ぶ駅道の幹線（帖里干道^{テレゲン}）が通る交通の要衝であった。

当該期のこの地方の歴史地理学的な先行研究には、箭内互（1920）、陳得芝（1977）など優れたものがある。また、『中国歴史地図集』（譚編 1982a,b）として研究のひとつの到達点がまとめられている。だが、帖里干道の具体的なルート、また、当地方にあったはずのクビライとアリク=ブケが覇権を争い戦った「失木土腦児」^{シム（ル）トノール}の戦い（1261 年）の地、あるいは元朝有数の軍馬牧場があった「阿刺胡麻乞」^{アラホマキ}（『元史』巻 100 兵三・馬政）などの歴史上の要地さえ、いまだその場所が確定していないのが現状である（図 1 参照）。

さらに、「確定している」とされる歴史舞台の位置にも疑問点が多々ある。たとえば、ここで採りあげる「魚兒泊（^{ぎょじはく}灑）^{ろく}）」という湖である。これについては各種先行研究において、内モンゴル自治区赤峰市ケシクテン旗のダリ（達里／達来諾爾）湖だと考証され、それが広く研究者の間で定説になっている。しかし、わたしたちは当時の史料を再検討する過程で、この説に疑問を抱いた。そこで、現地踏査と衛星写真を援用して考察を行った。

その成果を踏まえ、わたしたちは従前の「魚兒泊（灑）」の位置比定に誤りがあることを論証し、新たな説を提示するに至った¹。また、その論証を通じ、モンゴル高原東南部の金元期の当該期の地名比定研究の重要性と、通説といえども再度検討することの必要性を主張している。

「魚兒泊（灑）」は、『長春真人西遊記』だけでなく、『（張徳輝）嶺北紀行』、『元史』などにも登場し、金中都・元大都があった華北平原と漠北とを結ぶ交通路上に位置したことが知られている。『長春真人西遊記』には、この部分、おおよそ次のようにある。

撫州（現河北省張北県治所）を過ぎたのち、1221年陰暦2月15日に「蓋里泊」^{がいはく}を経由して東北に進路をとった長春真人一行は、人影の少ない乾燥地帯のなか、馬行5日^{めいしょうかい}で「明昌界」とよばれる金代の界壕を越える。ようやく3月1日、砂漠地帯を抜け「魚兒灑」に至った。そこでは集落が営まれ、人々は農耕や漁労をしていた。ふたたび3月5日に出発。木々の無い草原の広がる遊牧地帯を東北方向へ進んだ。そののち一行はフルンブイル地域を経由して、フルン湖からヘルレン河に沿って西進した。そして、5月16日ごろ、ヘルレン河が南流から東流へ大きく屈曲する辺りに至った。そこで道は「魚兒灑路」と合流していた。

この史料を基礎に、現地踏査と衛星写真に基づく歴史地理的調査、考古学的一般調査を行った。その成果に基づき、内モンゴル自治区シリングル盟アバガ（阿巴嘎）旗の科尔チャガン湖（呼日查干諾爾）こそが「魚兒泊（灑）」であるという新説を提示した。そのおもな根拠は、湖の規模・形状や、湖までの旅程が史料と一致すること、湖畔に金元期の遺跡が存在することである。当時の旅行記に書かれた漠北への旅程は、旧説に拠った場合、東へ大きく迂回しなければならず、不自然であったが、この新説を採用することにより、スムーズに直線的に華北平原と漠北とを結ぶようになった。

今回の考察の副産物として、明・清代にも、科尔チャガン湖は京師（北京）と漠北とを結ぶ交通路上に位置したことが判明した。長きにわたり、交通の要衝としての役割を果たしていたものと想定できる。

モンゴル高原東南部は、金代には遊牧諸民族との和戦両面での交流の舞台、元代には外モンゴルと上都・大都を結ぶ幹線駅道（帖里干道）が通り、強力な軍団や軍馬牧場が置かれるなど政権を支える要地であった。だが、それらの実態は明らかになって

いない。今回の考察を通して、「魚兒泊（瀨）」だけでなく、当地方の歴史地名比定の先行研究の多くに、誤りのある可能性が強いことが明らかになった。

脆い砂の上に、いくら堅固な楼閣を築いても意味はない。今回行ったような地名比定といった基礎的な作業が、金元時代史研究において、顧みられるべきであろう。

それ以外の成果を含めた研究の全容は、近日中に学術論文はもちろんのこと、書籍などでも広く紹介したいと計画している。



図1 河北省北部から内モンゴル東南部における歴史上の地名

(『国家公路網及公路里程地图集』山東省地图出版社、2008 に筆者加筆)

最後に、多大なご助力を賜った JFE21 世紀財団には、衷心より感謝を申し上げたい。本研究に支援いただいたことで、それまで漠然としていた研究方向に筋道が付けられた。改めてユーラシア内陸部における歴史・考古・地理学的研究、そしてその統合化したスタイルのアプローチが重要であると確信した。支援を無駄にすることなく、これを土台として、今後この分野での発展に寄与し、当該地域と日本との文化的橋渡しの役を演じていく所存である。(文責：白石)

1 これについては「魚兒泊（瀨）」再考～金元期におけるモンゴル高原南東部の歴史地理～」と題し、2009 年度第 2 回「遼・金・西夏に関する総合的研究～言語・歴史・宗教～」研究会（2009 年 12 月 4 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）にて発表した。